

## 神の驚くべき恵み／沈黙と賛美

今から二千年前のユダヤの世界ではユダヤ人と異邦人との間には大きな差別の壁があった。ユダヤ人は異邦人を宗教的に汚れたものと見なし、彼らとの接触を避けた。ユダヤ人が異邦人の家に入り、食事を共にするという事は考えられないことであった。それ故、ペトロがカイサリヤに行き、異邦人であるローマの百人隊長コルネリウスの家に入り、彼とその一族に洗礼を施し、彼らを教会の中に受け入れたという出来事は、長い間そのようなユダヤ的伝統の中で生きて来たエルサレムの弟子たちに大きなショックを与えた。

そこで、ペトロがカイサリヤからエルサレムに戻って来たとき、特に、ファリサイ派からキリスト者となった人々で、入信後も依然としてユダヤ的伝統、儀式、律法を重んじている割礼派の人々がペトロに向かい、「あなたは割礼を受けていない者たちのところへ行き、一緒に食事をした」と言って非難した（11：2「無割礼の者」というのは異邦人への蔑称であった）。

そこでペトロは口を開いて、異邦人コルネリオスとその一族の回心の出来事とそれに至るまでの事の次第を詳しく説明した。「天から下ってきた大きな風呂敷の幻」（10：9～16）にどんなに大きな感動を感じたことか、そしてコルネリオスの家で神の驚くべき救いのみ業を、彼自身どんなに大きな驚きをもって目撃したかを、情熱をこめて報告した。ヤッファからペトロに同行した6人の弟子たちも、同様にそれを証言したであろう（12節）。人々はこれを聞いて、神の恵みの事実の前に沈黙する以外になかった。そして、彼らは「それでは、神は異邦人をも悔い改めさせ、命を与えてくださったのだ」と言って、神を賛美した（18節）。

問題はこれで解決したわけではない。神の前には、ユダヤ人も異邦人もなく、割礼なき異邦人も、自分たちユダヤ人と同じようにキリストの恵みに招かれているというこの教えは、伝統的なユダヤ教のもとで生きてきた者にとってはあまりにも革命的であったために、そのことがみんなの者に受け入れられるまでには、なお時間がかかった（使徒言行録15章参照）。

しかし、この段階において、コルネリオスとその一族の回心の出来事はペトロとエルサレムの指導者たちの、異邦人に対する考えを一変させた。キリストの福音が一民族に限られたものではなく、世界的な広がりをもった神の恩寵の招きであり、ユダヤ人だけでなく、すべての民に与えられた神の恵みであること、従って、教会は、この異邦人宣教を、神から与えられた使命として果たしていかなければならないことを教えられたのである。

「革命」という言葉を、政治的な意味でなく、或るもの、または或る状態が急に発展変動して、人間に、或いは社会に、ラディカルな影響をもたらすこと、と解するならば、万民の救いを説くキリストの福音はまさに、そのような革命的な変化をもたらす神の恩寵の力であった。異邦人コルネリオスとその一族の回心は、エルサレム教会をユダヤ教の枠から脱皮させ、キリストの福音の恩寵性、世界性、普遍性を告げる出来事となった。